

昭和二十四年七月二十三日  
 昭和二十四年四月二十五日  
 第三行三(種郵便物認可)  
 (毎月一回・十五日発行)

(通第三五八号)

# 慈光

## 目次

撮	と	念	法	自	一	正	知
取	も	仏	悦	照	道	像	恩
不	し	詩		日	会	末	報
				誌	の	和	
				抄			
捨	び	抄	抄	十	記	讚	徳
石田十九三	花田正夫	木村無相	清水凡禿	西元宗助	榊原徳草	福島政雄	近角常観
(21)	(19)	(17)	(14)	(12)	(8)	(4)	(1)

第三十一卷 第四号

# 知 恩 報 徳

近 角 常 観

御恩を知らせていただくということは容易のことではない。親鸞聖人の御出世されたればこそ、我等が如来の御恩を知らせていただくことが出来たのである。

○ 「かたじけなくもわが御身にひきかけて、我等が身の罪悪のふかきことをもしらず、如来の御恩のたかきことをもしらずして、まよえるをおもいしらせんがためにてそうらいけり」

○ 御恩々々といえは、何気なくいえど、一通りのことではない。

○ それゆえ、聖人の常の御述懐に「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と仰せられ

蓮如上人「御膳を御覧しても、人のくわぬ飯をくうべきことよと思召し候よし仰せられ候」。衣食につきても、御恩じゃ、御恩じゃと口には言いながら、心ではあたりまえのように思い、衣食すべきものを衣食するように思うて居るのは、実に御恩しらずである。我等は衣食する果報のあるものではない、無事で日暮しの出来るべき価のあるものではない、人の尊敬を受くべき資格のあるものではない。それが安々と衣食をたまわり、日暮しをなし、過分なる果報をいただくということはよくよくの御恩である。

○ 衣食の恩、社会の恩、乃至父母の恩にいたるまで、この価なきものに与えらるるということがわからぬば恩がわからぬ、この価なき、罪深きものを捨てたまわぬということには真に如来の御恵みである。

○ 親の恩がわからぬものがどうして仏の恩がわかるうかと云うのが世間の言葉である。されどそれは逆である。仏の御恩がわからぬものがどうして親の恩がわかるものか。

○ わが身が悪い悪いと歎きつつあるは、我身の悪いが知れたのでもなく、また御恩が有難い、有難いと喜ぶばかりが御恩が知れたのでもない。

た。

○ このたすからぬものをたすけて下さる御恩を知らして下されたのが、御一代のお教化である。教行信証のはじめに「難思の弘誓は難度海を度するの大船」と仰せられた。とてもわたることの出来ない海を渡して下さる御恩である。同様に「無碍の光明は無明の闇を破する慧目なり」とあるのは、とても明るくなることの出来ぬ闇を破って下さるお光である、ここが無碍と仰せられ、難思と仰せられた要点である。

○ 私の父が臨終に「仏がたすけて下さるのが有難うございませぬ」と私が申しましたところ、父が「たすからぬものを」とかむらせて下されたのが、今更つくづく有難くなってくる。

○ わるいからよくせねばならぬ、よくせねばならぬというのは、修養上から言えば感心なことであるが、信仰上から云えば、まだよくなれる資格のあるもののように買いかぶっているのである。

○ 悪くてもたすけて下さるのが有難いというのは、真にわが身の悪いことが知れたのじゃない。ややもすれば、なおより以上に悪しきことをなし得るように思う下心がある。真に底下の凡愚であると分って居らぬのである。

○ 聖人が「いずれの行もおよびがたき身なれば」の一言は実にこのよくなる資格なき我身に、て、またこのうえ悪くなり得ぬ我身たることを知らして下さる御教化である。

○ 法然聖人が「貧窮、困乏、小聞、小見、破戒、無戒の者のための選択本願なり」と示したまいし教をこうむりて、実に有難きお慈悲なりと喜びたまはしことは、三百八十余人みな同様なりしかど、出来得るかぎりには念仏の外に善きことをしようとの心が残っている、またいずれの行もおよびがたき身なればとの自覚が起っていないかった。

それ故、結局自分は、貧窮困乏、小聞小見、無戒破戒でないということになる。故に、わがための本願なりとの心が起らぬ。しかるに聖人ばかりは、無戒破戒、愚痴無智というは他人ごとでない、自分のことである。「悲しいかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑す」と慚愧せられたのである。

○ 「さればそくばくの業を持ちける」親鸞をたすけんとの本願なれば、「ひとえに親鸞一人がためなりけり」と仰せられたのである。これ実に、わが御身にひきかけて我等に知らして下された如来の御恩である。これは十方衆生何人も知らねばならぬ御恩である。実に私一人の罪業深重なために長々のご苦勞をおかけ申しました。五劫思惟の御心配も私一人が悪かったためであります。今まで軽々と御恩々と云うて居たが、かほどまでの御恩とは知らずに居りました。これがすなわち如来大悲の恩徳である。

○ 恩を知るといふことは、実に容易なることではない。このご恩を知らせて貰うたは実に御開山聖人御出世ましまして、わが御身にひきかけて知らして下さればこそである。その聖人の御信心をわが身に知らして下された有縁の善知識の御恩である、これ実に師主知識の恩徳である。

## 正 像 末 和 讃

親鸞聖人は伝教大師の作と伝えられる末法灯明記を深く非常な感激をもってお読みになつています。正像末の年代を分けるについては経文の上で二三の異説があるようでありますが、仏滅二千年以後が末法の世という説に従えば、後冷泉天皇の永承七年から末法の時代に入ることになります。そうすれば聖人の晩年は末法に入つてすでに二百年近く経過したということになります。その間の世の乱れは打続いています。末法灯明記そのままの世相に対して、はるかに釈尊の御在世をおもひ、万感胸にせまるものがあらせられたに相違ありません。

聖人素  
康元(1257)年

○ 釈迦如来かくれまして 二千余年になりたまう  
正像の二時はおわりにき 如来の遺弟悲泣せよ  
何とも云えない痛切なひびきであります。

末法五濁の衆生は正しい修行も出来ず、さとりも出来ないといいことを聖人は痛感していられます。釈尊の遺したまうた法はことごとくかくれてしまつて、弥陀の本願ばか

○ 聖人が法然聖人の御恩を感謝して、  
曠劫多生のあいだにも、出離の強縁しらざりき  
本師源空いまさずば、このたびむなしくすぎなまし  
と仰せられ、聖覚法印が「つらつら教授の恩を思うに実に実に弥陀の悲願にひとしきものか」と仰せられたが、こ

○ かく、たすかられぬ我身をたすけたまう御恩がしれた以上は、もはや人生の一大事は結了したのである。多生曠劫の宿題は解決してしまつたのである。我が身の務として為すべき仕事はない。残生の一挙一動、みな感謝の生活である。いわんや、かくの如く高く、かくの如く深き御恩に対しては、如何なる感謝も大海の一滴、須弥山の一塵に過ぎぬのである。

○ 聖人が「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳も骨を砕きても謝すべし」と仰せられた、これ実にまた我等が聖人に対する知恩報徳の情である。年々歳々報恩講にあいたまつりて、益々罪深き我身なることを知ると共に、益々広大なる御恩を知らせていただく次第である。南無阿弥陀仏。(求道六卷十号より)

## 福 島 政 雄

りがひろまっています、此の世は仏滅後第五の五百年であり争いばかりの世の中になり、五濁悪世という名を得ているといわれています。

○ 無明煩惱しげくして 塵数のごとく遍満す  
愛憎違順することは 高峯岳山にことならず  
衆生の邪見が盛んであって、念仏の信者を疑謗するといふのは、法然上人流罪の時のことを述べられるのであります。この世の中が立ちなおるためには、この世の一切衆生が如来の悲願を信するより外に道がないと深く信ぜられるのであります。

○ 末法第五の五百年 この世の一切有情の  
如来の悲願を信せずば 出離その期はなかるべし  
たとい大菩提心を起しても、自力の大菩提心は到底徹底するものではないと、聖人は叡山の御修行時代のことをおもひ起されます。

自力聖道の菩提心 ころもことばもおよばれず

常没流転の凡愚は、いかでか發起せしむべき

どうしても超世の悲願にいのちを投げこむより外はないと、法然上人の御化導をはじめてお受けになった時のことを思い起して、これこそ末法の世に生れた凡愚のわが身に開かれた唯一の道と述べられるのであります。

超世無上に摂取し 選択五劫思惟して

光明寿命の誓願を 大悲の本としたまえり

ここにわが聖人は浄土の大菩提心を發起したまうたのであります。

浄土の大菩提心は 願作仏心すめしむ

すなわち願作仏心を 度衆生心となすけたり

度衆生心ということは 弥陀智願の廻向なり

廻向の信樂うるひとは 大般涅槃をさとるなり

如来の遺弟悲泣せよと述べられた聖人が、ここに至って大信念を披瀝せられるのであります。たゞ弥陀の御はたらき一つである。それを身に受けて一切衆生への御廻向を感ずる。そこに聖人晩年のいのちの底力が強くでています。

如来の廻向に帰入して 願作仏心うるひとは

自力の廻向をすてはてて 利益有情はきわもなし

末法末世なるが故に、無上の法に値遇するという聖人のお心持があります。自力の廻向をすてはてるところに、絶対自由の境地を味わわれるのであります。絶対他力なるが

故に自由であります。御自分は絶対無碍の仏陀の力の発動の御縁となつていられるというお心持であります。これは聖人においても晩年にはじめてはつきりとなされた心境であるかと思われます。そこに無限の利益衆生ということがあるのであります。

かようになれば煩惱と菩提という問題も解決せられます。煩惱が転ぜられて行くところに菩提の味わいがあると述べられます。晩年の聖人にも煩惱は相当に強いものがあつたと思われます。併し煩惱が強いほど摂取の光明を深く感ぜられるのであります。同時に末世末法の時代に生きている身なればこそ釈尊の御法の中でも最上の御法に値遇しているというご自覚も強いのであります。七十年八十年という人生の行路を様々の苦惱の中に辿つておいでになった聖人なればこそ、煩惱菩提一味という感じも深いのであります。

弥陀の智願海水に 他力の信水いりぬれば

眞実報土のならいにて 煩惱菩提一味なり

他力の信水は聖人のいのちの流れであります。その流れは弥陀の智願の海へと常住不斷に流れこんでいるのであります。しかも晩年の聖人においては大河が洋々として大海に流れ入るといふ趣きであります。煩惱の濁水をへだてぬ大海に、濁水は末遂に浄化せられ澄まされてゆきま

す。

弥陀智願の広海に 凡夫善惡の心水も

帰入しぬればすなわちに 大悲心とぞ転ずなり

す。煩惱菩提一味という味いは、大河が大洋にそそぐ河口の趣きのようなものでありましょう。また濁つていますけれども、それは清浄な大洋の水に触れているのであります。正像末和讃において聖人のお心持は次第に高調して行つていきます。法蔵の願力は如何ばかり底力強く聖人のお胸にひびいてるであります。信心の智慧と云つて居られますのは、弥陀の智慧をたまわるといふお心であります。弥陀の智慧をたまわつて涅槃のさとりを開くと述べられるのであります。その願力の底力強さをしみじみと歌われるのであります。

無明長夜の灯炬なり 智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかざれ

願力無窮にましますば 罪業深重もおもからず

仏智無辺にましますば 散乱放逸もすてられず

人生の行路、如何なる時においても願力無窮ということを感じられます。併しながらわが聖人のように末世末法の痛切な体験をおして七十年、八十年と生きとおしておいでになつた方においては、願力無窮ということが殊にしみじみと感ぜられたのであります。罪業深重、散乱放逸というご自身の姿を眺められても、それが重からず、すてられずという願力無窮の世界に全生命をなげ入れて悠々として、晩年の行路を歩いたもうお姿がここにあるのであります。

聖人の三帖和讃の中で、正像末和讃が最もよく出来ているといふ人があります。実際そうでありましょう。晩年の聖人のお心の全幅がここに披瀝せられていると感ぜられます。末法の世においてこの人の世の有様を大観しつつ仏徳の讃歎に讃歎をつづけ、一方では深く御自身にもいましめられているお心持がよくあらわれています。苦海に沈んでしまはずの身が、何とも云われぬ誓願に救われている、その救いは大願の船からの救いであります。聖人は海という言葉を始終用いていられます。功德の大宝海とか、大海とか、生死大海とか沢山のお言葉があります。この人生は生死の大海である、苦しみの海である。衆生はこの苦海において煩惱の波に溺れている。この苦海というのは果

てしもない大海原であります。この大海原を見とおしておいでになる聖人の心眼にはつきりと映って来るものは、弥陀観音大勢至の大願の船であります。煩惱の波に溺れている衆生によびかけて、救うて船にのせたもう有様であります。聖人も救われる一人として、衆生と共に救われるというお心持であります。

弥陀・観音・大勢至大願のふねに乗じてぞ

生死の海にかみつ 有情をみほうてのせたもう

生死の大海、聖人はその波にもまれて七十年、八十年を生きておいでになっています。救いの船に出合ったのは法然上人のお化導を受けた時からであったというご追憶は深いものがあります。併しその時以来救いの船にのせられて御自身は溺れる衆生を眺めてあわれんでいるというのではないのであります。七十才、八十才となっても今なお溺れようとしている、唯弥陀三尊の御よびかけの音が絶えずきこえて、必ず救いの船にのせられるという希望を持ち、同時にまた一切衆生と共にという御念願が切実であります。

弥陀大悲の誓願を ふかく信ぜんひとはみな

ねてもさめてもへだてなく南無阿弥陀仏となうべし 聖人にとって念仏称名は弥陀三尊のおよびかけの声であります。そこには決して決して溺れない、必ず救われるという信念があります。三尊の御手はすでに溺れようとする身にかけてられています。煩惱の波の中にありながら絶対の

## 一 道 会 の 記

花田先生のお話が終って、しばらく緊張を解くために休憩することになり、その間にお茶やお饅頭をいただいて満堂のさざめきが聞こえます。仏前と池山先生等の御霊前にお供えしたお菓子と同じものをいただいて身にしてみるようであった。次いで私から富山の長谷顕性兄の電報を紹介した。

ヨキツドイ キクカオル ユコロハセド ユケヌ ハセ

次に長崎の平岡坦様はご夫妻で毎年この一道会をたのしみにして居られ、これが一年の節目であり、一年の新しき始めであると申していられたが、突如病気にかかられ待望の一道会に出席不可能となり、奥様も看病に専心せられることになったのであった。

ミナサマニオメニカカレヌノガザンネンデス。ヨロシク オツタエクダサイ。ハルカニホンジツノカイヲシノビ、 ブツトシヤスルバカリデアリマス。ヒラオカ  
一道会も年を経ると共に、法友諸先輩のご往生や、別し

安心があります。それが晩年の聖人の信仰であります。この信仰から報謝の大活動があらわれます。晩年の聖人は京都の片隅に静かな生活を続けながら、静寂裡の大活動をなされているのであります。それは五十六億七千万、弥勒の世をかけての精神的大活動であります。聖人は永遠の求道者であり覚者であります。

如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も 骨をくたきても謝すべし

老いても精神がおとろえず、ますますしっかりとなって六十才以後九十才近くまで御述作に励まれたということは驚異すべきことであります。最後にいたるまでその精神上の中心目的を失わず、一筋の求道を続けられたところに、聖人の力強さがあり、これあるが故に九十才の長寿を保たれたのであると考えてよいかと思われれます。それになお浄土の音楽がきこえていたということが、聖人の心に超人生の和らぎをもたらしたと思われれます。聖人の和讃についていわゆる文学者という人々はその文学的価値を認めないようではありますが、それは聖人の和讃が憚慢界を離れた一種のリズムの歌であり、世俗の文学などを超越したものであることを物語るのであります。聖人の特色は感傷的でなく、人生如実の相を直視されたところにあります。この特色は晩年の聖人において殊に著しくなっているのであります。『晩年の聖人』より。

## 榊 原 徳 草

ては白井成允先生や池山寿夫先生の御往生など悲しい此土の相に遭い傷ましいことでもあります。

白井先生が坐って居られた場所も空白を感じて、ありし御姿をしのぶことでありますが、今年に向島諦宣師のご往生となり更に深い悲しみに沈む我等であります。師は毎年ご自坊の報恩講の日程を変更してまで、この会に参会下さいましたことを憶い哀悼の心切々であります。それで池山先生追悼録（松本解雄師編輯）の「呼子鳥」の中から向島先生の一文「池山先生の印象」を拝読し、師をあたらしく憶念しました。その文を左に掲げます。

三年程前の早春の頃であったと思う。私は私用で池山先生を訪問したことがあった。その折も勿論、信仰についてのお話もあったと思うが、どういってお話を承ったか今では全く記憶にない。この時の訪問が特に私の記憶に残っているのは、先生との対話の内容によるのでなく、その時始め

て私は先生の態度によって底知れぬ温かきをもつ先生の真情に接することが出来たと思つたからである。信心の徳に輝く露出しの慈容に満ちた先生の心を拝見したと思つたからである。と云うのは、丁度御食事を始められた所であつた先生と一緒に御馳走になつて、一時間余もお邪魔した後おいとましようとした。すると先生は等持院へ帰る近道を教えようと云われて、わざわざお宅の後の灌木林を通つて衣笠山の麓まで送つて下さつたのである。その頃も先生は余り御健康がすぐれなかつたようで、マントを着、ステッキをついてゆつくり歩かれたように記憶する。そして私の姿が山の雑木に見えなくなるまで、あの温容に微笑をたたえて林の中にじつと立って見送つて下さつた。私はそのお姿を拝見した時、はじめて本当の先生に会つたやうな気がした。それは私には單なる一個の人間池山栄吉ではなかつた。それは正に慈悲に溢れた魂、永遠不滅なる人格の露出であつた。私は胸一杯に云い知れぬ温かきを感じながら帰宅した。今もなお私は不滅なる人格の象徴としてあの時のお姿をまざまざと胸に描き出すことが出来る。

宗教における愛の対象は、人の文化的能力や道徳的人格でさえでもなく、あらゆる人間の粉飾を剥脱した赤裸の魂そのものであると云う。先生は正にこの意味の宗教的慈愛の体得者であり、大いなる実践者であつた。先生に接する

貴重な種々な天賦を綜合して、渾然たる宗教的人格たらしめたもの、即ち「愚痴にかえて念仏する」云い換えれば「ただ念仏する」ことのみである。

先生が「ただ念仏して」先生の分に従つて生きて行かれたように、私もまた「ただ念仏して」私の分に従つて生きて行こうと思う。又先生が「ただ念仏」しつづ先生の業海に入り、これを持ち切つて浄土へ還えられたように、私もまた「ただ念仏」しつづ、私の業海に入り、ひたすら先生の御跡を慕おうと思う。これが私に許された先生に対する報恩の唯一つの道であると信ずる。

私は今この記を写し終え、池山先師のお跡へ報恩唯一の道を生き、そして先師の還えられたお浄土に、今は向島先生も俱会一処して、この私を照護し導いて下さつて居られることを仰ぎ謝するばかりであります。

次に私は池山先生の奥様の日記の中の十月二十六日の部を拝読した。

この日は幾分ご容態のよい日でありました。お祖母さんが「お庭に咲きました」といって、白い大輪のバラを一本一輪挿しにさして持ってきて下さいましたら、いかにも明るい微笑をたたえて、つくづくご覧になりました。バラと萩、それは最もお好きな花でありました。よく「今にこの

機縁を持った人は誰でも、自分一人にをそぎかけられるかの如き先生の深い広い温かきを感じたであらうと思う。このようなことは、常識の世界では不思議と云う外はないが宗教的人格の世界においては当然の事である。しかしそれは稀有なる当然である。先生にあつては鋭い知性と、深い情熱の二つが信心のルツボに溶解灼熱して、世に稀な人格の光に輝いたのである。吾々は先生の人格に接して始めて「仏心者大慈悲是也」の意味を如実に読みとることが出来たと云えよう。

私は先生によって私にさし出された慈愛の手の余りにも大きく、これにこたえるべき私の手のあまりにも小さく、力なきを悲しみ愧じるものであるが、今この魂の大先輩を失つて、しかもなお彼岸からあくことなく差しのべられつつある導きの手を感ずる時、如何にこれに応えるべきかを思わざるを得ない。ここに思い出されるのは、先生の常のお言葉である。「それでは私もまた」というかの聖人に対する先生の大きいなる模倣である。そこで私もまたこの先生の大きいなる模倣を真似ようと思う。しかし先生の優れた才幹を真似ることは出来ない。又あの高い潔い人格を真似ることも出来ない。さらに先生に特異のものであつた、あの深い静かな宗教的熱情はなおさら真似ることは出来ぬ。私に許された先生に対する唯一の模倣は、先生にそなわつた

庭を一面バラと萩とで埋めてしまふんだ。敏郎が帰つて来たらバラ園をやらしてみよう」と無邪気な夢を語られたものです。かつて共に植え、共に眺めたこれらの花が今は形見となつて、庭に懐かしい思出を語ってくれるようになりました。どんなささやかな形見でも、思出でも、一つとして疎かにしたくない、この胸に最も印象深く懐しまれるものは、生前特に敬仰愛好せられたものであります。人間のほかない記憶は見なければ忘れ、思い出さねば消えてゆきます。せめて私の生きていての間だけでも懐かしみたいと記憶から去らないうちに書き残しておきましょう。

書物は、歎異抄、教行信証、ファウスト、ツアラッストラ、神曲、ウイヘルムマイスター、晶子歌集。

人物は、釈尊、親鸞聖人、法然上人、聖徳太子、教信沙

弥、篤信な人、青年、少女。

趣味は、野球、映画、静思、閑居、囲碁、書道、浄瑠璃

鑑賞、虫声と星の鑑賞。

嗜好は、煎茶、煙草。

景色は、蓮華谷、曙の空。

音楽は、端唄秋の夜、歌謡曲青い芒、船頭可愛や、並木

の雨、城ヶ島の雨、追分。

歌手は、市丸、浜子、ミスコロソビヤ、藤原義江。

風俗は、日本鬻、婦人の断髪、浴衣姿、結城の着物、鳥

打帽。

言葉は、東京弁。

動物は、犬、カナリヤ。

食物は、湯豆腐、ぎんぼうの天婦羅、鰻、煮べ、強飯、

鮪の握り、鯛の酢入り、くさやの干物、天婦羅蕎麦、

甘酒、小豆金時、お萩、羊羹、唐饅頭、じょうよ饅頭

若い時は牛肉、豚。

果物は、柿、巴且杏。

花は、バラ、萩、桔梗、撫子、野菊、水仙、梅花。

樹は、樅、杉、赤松、アカシヤ、百日紅、紅葉、合歡の

木、四方竹、どうだんつじ。

色は、紫、紺、グリーン色。

右を読み終って、私の此頃の感慨として、南無阿弥陀仏の御徳として、光明無量・寿命無量について、無量の意味の驚くべきことを深く味ったので、それを簡単に述べた。

無量とは量り無しであって、無限とか永遠とかいう意味である。数にしても無限に数えられるかも知れないが、数える意味から云えばある程度の限定が数の基本価値で、それを無限数に至ることは意味から外れるとも云える。無限とは限定が無いことを云うので、永遠とか、無窮とか言う、初めから限定を否定して絶対とか永遠とかいう語であ

る。光明は仏の御智慧を表わすから「光明無量」とは御和

讃に「解脱の光輪きわもなし」「智慧の光明はかりなし」

とあるように、涯（はて）もなく際（きわ）もない無辺・

無量を表わしている。又寿命無量は時間的な面の永遠性を

表わして、これも無限永遠の寿命の仏徳を表わしている。

この仏の勝れた光・寿二無量に対比して、我等の空間と

か時間という概念内容は如何に貧弱なものか、吾々の寿命

は精々百年であり、働く時間、場所も限られたものである、

小さい日本列島の中の一部分を大概の人々は往復して、

死ぬのである。太陽も五十億年、又は百億年で燃えつきる

と学者は言う。そうすればこの地球も勿論消滅する。何億

光年の彼方の星でも消滅する。このようにすべては限定さ

れ、無常の鉄則からのがれることは出来ない。生・住・異

・滅し、生・老・病・死する。

この我等の世界と仏の世界と、即ち御念仏の呼び給う仏

の浄土と吾々の穢土である忍土と訳す娑婆と、いかに天地

の差があり、雪と炭の差があるかに驚くのである。この光

寿二無量の徳相をそなえ給う仏が、私を呼び、南無阿弥陀

仏の六字となって顕現されお浄土への道を歩ませて下さる

のである。

こんなことに気付いて、驚きにも似た感銘をお話したの

# 自照日誌抄 (十)

— 超日月光照塵刹 —

## 西元宗助

こんにちまで私

この店に助けられ

さまざまな 月日

経てきた

### 風

風がふいて

娑婆の風が身にしみる

店のいちにちでありました

### 店

売上げ すこし減ったが

今は老いし二人で

この店をささえ

ゆけるところまで

二月のある暖い日、大阪の大今堅の専光寺さんにお参り  
しましたら、思いがけなく、詩集『煩惱林』（大阪・難波  
別院刊）の著者、榎本栄一翁がおいでくださる。二人して  
さっそく木村無相さんの健康を案じながらお噂さす。そ  
れから、場末の小化粧品店の主人である翁は、スーパー・  
マーケットに圧迫されて小売店の売行きのめっきりへった  
こと。不景気がお腹（なか）にまでひびくということ。昨  
日一軒やめ、今日一軒やめ、市場のさびれていく模様をと  
つとつと話される。そのお話の全体が、そのまま南無阿弥  
陀仏であるのに心うたれる。そういえば翁には、自分のお  
店についての詩が多い、その二、三を左に紹介してみよ  
う。

蒙 光 照

家内は きょうの売上

乏しきをかこつが

この売上が

尽(つ) きぬ泉の如く

われらを養いつづけてきた

才市さんは

下駄けずりながら

私はこの店で

小さな商いしながら

わがあさましき照らさるる

○  
なお九十四才の三島翁が、演壇の一番前に坐して、端然としてご聴聞くださる。耳も達者、足も達者。この翁は、その次の日曜日、津村お別院の法話会にもお同行と共に参詣になっていられた。わたしは二、三年前から親しくしていただいているので、挨拶して握手する。その握手の力強かったこと、わたしの右手がしびれるほど。

○  
念仏申して、気づくこと。自分の底知れぬ深い深い我執

法 悦 抄

○  
本日は私の祖母、釈尼慧声様の十三回忌。私の今日お念仏を喜ばせていただいていることは、全く祖母の御臨終にあわせていただいたたまものである。唯一日熱におかされたばかりで、七十九才の老令のため、尿毒症を発せられた。熱はさがり意識はたしかなので、私共家内一同は全快したと思つて小踊りしたのも束(つか)の間、祖母は「このたびこそはいよいよお浄土まいり、一足おさきに御免」

といわれたのには意外の感じがした。

これほどよくなったのにと、何が何やらわからなかったが、どこか矢張り悪いところがあったのだろうと後から思ったことであつた。その死の直前にひかえの祖母の言葉を二つ三つ書いてみよう。

「握り飯と御信心はテンデンもちだ。相手がいくら大きな握り飯もっていたとて当てになるもんじゃない。御信心もその通りで、親が信心得たとてそれが何のたしにな

の迷妄。「自分が自分」という、この我執の迷妄。この迷妄のはかり知れぬ深さに毎日毎日、あきればはてているばかりであります。

だからいかに殊勝げにヒューマニズム(人道主義)といつてみても、その奥底には我執が、どろどろにとぐるをまいていて、どうにもならない。しかもそのことに真実、気のつかないところに、われらの根本無明と生死流転がある。そのことを近頃、つくづくと思う。されば、いよいよ「そくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」でございます。

二月末日 誌す



清 水 凡 禿

○  
るか。めいめいの御信心が一大事じゃ」  
「もし明日まで命がながらえたなら本誓寺様の御院主様と岡山様にあいたい。今この臨終の場合、御院主様にあいたいと云ったなら、私の御信心が不安で呼びびするじゃないかと心配するだろうが、私は決してそうじゃない。この私のよろこびをお話したいのだ」

○  
私の子供の頃、近所に一人の婆さんがおつた。雨の日でも、風の日でも、かかさず毎晩私の家を訪れて、毎夜家人と語りあつた。そのお婆さんがよくこんなことを云つた。

「私の死ぬときコロリと死んで、誰にも迷惑をかけぬ」と。それに対して祖母は常に云いました。

「死の縁無量だ。どんな死に様をするか知れたもんではない」と。

結果は皮肉でした。その婆さんは妙な病氣になって、なが患いをして、家人から虐待をうけて死んだ。祖母は、唯



一日だけ病んで前述のような往生を遂げた。あとで祖母の行李をしらべたら、万一の用意にと作っておいた沢山のオシメが出た。これには唯頭がさがった。

○  
お天気で困る人もあると思えば、また雨ふりで困る人もある。その人々が各々神様に祈願をこめて、めいめい勝手なお願いをたてる。神様ならずともまったく困るはずだ。我々の願い、それは一体どんな願いか。

どの願いでも、結局自分の都合のよい欲望を満足さす願いだ。それは真実に願わなければならぬ事であろうか。それ以外に、果して願わなければならぬ願いがあるであろうか。

私に本年四十二才。俗に世人は厄年という年だ。まず年の始めの二月に父を失い。その後つきからつきと経済問題や何やかにやわいてくる。が、しかしどの問題にしても、一つとして意外と思う事件がない。始めからわかりきって居ながら、その始末をなし得ずに、ぐずぐずとして今日にいたったので、その結果として現れたことばかりだ。父の死と云い、経済の問題と云い、一つとして厄年なるが故にと、その方へ廻す事件はない。すべてが私の業(ごう)のあらわれだ。唯それをうけて行くだけだ。

(昭和十・九月)

い見方より出来ぬ私が、いつのまにやら、いくらかでも私は罪深い浅間しいものであると見させていたたいのは、一体どうしてであろうか。夜行で富士山の前を通っても、山もあり、目を持ちながら見ることが出来ない。光があつてこそ秀峰富士を眺めることが出来るのだ。

それなのに、私が極悪深重の凡夫と知ったことが、自分が賢くてそう見出したのだと、光によって見させていたなきながらも、その光の中にあることには気づかず、外に光を求めようとしているために、光を見出しかねているのではあるまいか。松陰の暗きは月の光かな。(古歌)

(昭和十二・十月)

或る日、或る先生のお宅を訪れたら、どなたも居られず、いくら呼んでもお返事がないので、裏の畑の方に廻ったら、先生は小春陽を背にうけながら、無心に鉢植の手入れをしておられた。

ところが、その小さな鉢植のことごとくが、土ではなく砂が盛られて、そこに草花がさされてあったのに驚いた。「一体これはどうしたものでしょう。土ならいざ知らず砂では花が栄養分をとられないんではありませんか」と申しあげたら「おお、君は全く素人(しろうと)だね。植木の根ざしをするにはこうするもんだよ。まず最初は栄養分のない砂に植えて、水分だけ吸収させ、その間に小さな根

広い家から狭い家へ移って来て、沢山の荷物を運んで、身動きならぬ生活をしている今日この頃、つくづくと私の生活を反省させられる。そうだ、用のない、否、生活の必需品ばかり残して、あとは売払ったらよさそうだが、一つ一つに中々に煮え切れぬ執着がついている。それから来る身動きならぬ私。否、物に限らず、私のなしたこと、思ったことすべてが、私を縛っている。ほんとうに悲しい事実

(昭和十一・十一月)

節分の翌日、あるところで「私の家では昨夜忘れて豆をまきませんでした」と云われたので、それはほんとうによい事をなさいました、若し良かったら、先ず真先に家から出なければならなかったでしょうからね。

昔の鬼は、今の鬼とちがって、大分恐ろしいようであるが、どこかに従順さがある、わずかばかりの豆でさっさと逃げて行ったらしいが、当今の鬼はなかなかそうはゆかぬらしい。一体どの位の豆をまいたら逃げて行くのかしらん……。

(昭和十二・三月)

「私は極悪深重の凡夫であると思いますが、どうしても光を見出し得ませぬ」と、さる入のお尋ね、一応御もつともとうなずかれた。

さて、自分自身を見るのに、どうしても自分の都合のよ

が生じた時に、初めて土壤に移すものだ。根もなく栄養分を吸収する機能のないものを土壤に植えることは、いたずらにその草をくさらすにすぎないのだ」と。

この根ざしのお話を承って愕然たるものがあった。そうだ。自分などは法味ゆたかな家庭にこうした生活をさせていただいていることは、なみ大抵のことではなかったことを味わわせられた。と同時に、ややもすれば他人様に無理矢理にむづかしい理窟を述べて押し売りする自分が、おはずかしい気がした。

(昭和十二・十二月)

庭前の落葉を掃いていたら、慈文翁がやって来た。そして私の健康を気づかってくれた。

その後にあうと「下ばかり掃いていると、上の方はお留守になつて……」と。サテはかねがね取ろうとしていた玄関の蜘蛛の巣が見つからなかったかやと、赤面した。

そうだ御掃除ばかりじゃない。私の日暮らしもまたその反面ばかりの生活している。そのために母や妻を泣かせてばかりいる、まことに申しわけない。唯慚愧あるばかり。

(昭和十三・十一月)



念 仏 詩 抄

木 村 無 相

お聞かせが

和上とおおせに

お聞かせがお与え  
じゃ

往相廻向と言うも

お聞かせじゃ——”

お聞かせ聞いて

それからそれを

信じてではない

お聞かせが お与え

お聞かせが ご廻向

お聞かせが お助け

お聞かせが 信——

和上!! 禿頭誠師

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

わすれ わすれて

和上とおおせに

無常をわすれ

造悪をわすれ

後生をわすれ

念仏をわすれ”

わすれわすれて

今日もくらしぬ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

機法が見えて

和上とおおせに

弥陀の手くだに

かかりてみれば

機法のありのまま

見えるゆえ

おそろしいやら

うれしいやら——”

わが鬼の機が見えて

おそろしいやら——

お助けの法にあえて

うれしいやら——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツは

和上とおおせに

三帖のご和讃も

如来さまのお呼びび声

八十通のお文も

如来さまのお呼びび声”

そのギリギリは

ナムアミダブツ

ナムアミダブツは

如来さまのお呼びび声

ナムアミダブツは

如来さまのお呼びび声

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

法 信 抄 (五三・一・八目)

心臓ゼンソクの発作、イキがつまる苦しさに、念仏も申せず、第一思い浮かばぬ苦しきですが、如来大悲に安心して、手放して苦しがることにしています。全く死の縁無量ということをつくづく感じます。この下機に、心に念ずる能わずんば称無量寿仏名とは、如来大悲の招喚のお勅命で臨終の凡愚に称名を求めていられるではありません

云々

# とももしび

花田 正夫

## 正覚の大音は響き十方に流る (讃仏偈)

名人の打つ鼓(つづみ)は近くで聞くと静かであるが、遠くまでひびく。下手な人の鼓は、近くでは騒がしいけれど、遠方には達しないと聞いた。

弥陀仏の衆生救済の本願が成就して、よろこびあふれる御声は、遠く十方にくまなくひびきわたっているのである。それにつけても名人の鼓を思うとともに、いわゆる英雄豪傑とさわがれた人々と、道を求めて一筋に清貧の中に生き抜かれた諸聖を思いあわせる。前者の生前の華々しい生涯にくらべて、後者は静かで素朴(そぼく)な歩みだが、時流れて久しくなると、一つは夏草に埋もれて夢の跡と消え、一つは年々歳々に人々の心のともしびとなつて、随喜する人々は次第に増して、余徳がますます輝いている。そうなる根源は、諸聖は仏陀の正覚の御声を御自身に聞

きとられて、そのままを伝えられるので、時間と空間に障えられないで、十方に遠くひびきわたる徳光が自然にあらわれるのである。

(昭和五三・六・二五日)

わが弥陀は名を以て衆生(もの)を摂し給う

(元照律師・阿弥陀経義文)

絶対の眞実は相対のわれらの外にあるが、相対をうちにおさめる。たとえば、親子知らずであるが、その子を親は決して捨てることはなく、お母さんが、お母さんがと名告ってはくむ。

広大な仏の眞実、大悲心は、相対五分五分の根性のわれらに、絶対無碍の光明を与えたい一杯から、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、称えやすくたもちやすい御名とあらわれて、いつ、どこで、何をしていようと、撰取のみ手を

さしのべてくださる。

相対の境から出られないわれら凡夫には、この御名ばかりが、仏心と感応道交させていただけの唯一無二の白道である。親鸞聖人が、教行信証の初めに「悪重く障り多きもの、ことに如来の發遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専らこの行(ぎょう)に奉(つか)え、唯この信をあがめよ」と全身全霊をこめてお勧め下さるのもそのためである。さて行に奉えるとは、六字の御名をともしびとさせていただいて、わが身の善悪をも、結果のいかんをも、あなたのお計らいにまかせよとおぼしめしである。丁度孝子が親につかえるようにせよとのことである。

(昭和五三・八・二七日)

映るとは月も思わず映すとは水も思わぬ広沢の池

(古歌)

この歌を新渡辺稲造校長は、旧制第一高等学校の学生にいつも引用されて、これこそ友情の至極だと語られたと聞く。私共の交わりは、相対五分五分のへだて心から、ああもした、こうもしたとなりがちであるが、そのためにいつか魂分(たまわか)れとなる。極くまれには自然に気が合つて、何年會わなくても、また遠く離れ住んでいても親しみを持ち続ける友人もある。しかしこれも無常の嵐の前に

はかなく崩れてゆく。

あるときフト気づいたことであるが、兄弟はよく争い合うけれども、共通の親の心にひきもどされて、しこりが自然に解ける。そのように友との交わりにおいて、万人共通の御親(みおや)のふところに帰れば、老少善悪のへだてなく、また利害得失をこえて、地下水が交流するように、消えることのない友情が保証せられる。こうした友人は私共が努力して得られたのでなく、全く御親からいただいた宗教的同朋と申すべきであろう。

(昭和五三・一〇・二二日)

「出会い」と「もう値う」

近頃、宗教者が出会いとよく云うが、親鸞聖人は「ああ弘誓の強縁は多生にももう値い巨(がた)し」と云われている。もうあうとは、当時、上位の人にお会いする時に使われた言葉である。出会いとは同等の者同士が互に歩みよつてあう場合である。

さて絶対者には、われわれは近よる足も、知る目もない。それなのにお会い出来るのは全く向う様のおはからいによるほかはない。無位無冠の法然房が宮中にお伺い出来たのは上皇からの御招きがあったからだと聖人が語られた

ことを思い出される。しかし自分の智目行足を欠く身を知らないと、知らず識らずに絶対者と同格に思いあがって、悪平等におちるものだ。

また巨しとは至難というより不可能を意味する。聖人が広大無辺の仏願におあいできたのは、すっかり仏様の善巧方便のおかげであると随喜されたのである。

太陽が出ると夜の闇が消えて、山も海も野も河も、そのままの姿が現れるように、心の暗い身も、仏光に照護せられて、左右の別、上下の秩序が知らされて、無理のない自然の道がひらけるのである。

(昭和五三・十二・十八日)

### 古きをたずねて新しきを知る

書画の真偽がわからずこまった人が、あるすぐれた鑑定家にそのことを聞くと

「まず毎日一生懸命にそれをながめ続けて、いったんどこかにしまつて、何日か後に、再び取り出して見て、なお飽きが来なかつたら真物(ほんもの)であろう」とのことたえであった。

また、ある有名な科学者が「科学は日進月歩どころではない、時々刻々に進歩している。だから自分が苦心して得

た新しい研究も、ほどなく古くなってしまふ。それにくらべ真実の宗教の教えは、いつまで経っても古くならない、いつも生き生きとした新鮮さがある。あたかも毎朝東からのぼる太陽であるが、いつ拝しても、いつも心があらわれる壮厳さがあるように」

と感慨深く話してくれた。

私どもは常に新しいものを、新しいものをと追求しながら、すぐ陳腐(ちんぷ)してしまつて、また新しいものを探し続ける。こうしたことを繰り返かえす前に、大思一番、すくなくとも千年以上にわたって人々の心のともしびとなつた古聖の教えを学び、飽くことのない真実味と、古くない新しいさを知る心の目を開かしてもらいたいものである。(昭和五二・二・十一日)

### よき人々の言葉

宮城道雄

眼の見える人は職業の選択にも私共よりは自由が与えられている。それだけに若い時は自分の現在の地位や職業に不満で迷うことも多い。その点私共盲人は幸せであると云い得る。私共は唯この道を行くより外はない、迷つたりする余地はない。唯まっしぐらにこの道を進んで行こう。その一念が私を今日あらしめてくれたとも云えるのである。

## 攝 取 不 捨

### 白道をたどりて

この年の末でしたか、又は翌年の寒い時でしたか、三十三間堂の近くの大谷専修学院で池山先生のご講演があるの  
で、杉原果円師と宮島君(専修学院の卒業生)と私の三人で参りました。

その時の演題は「七たび尊容を改め給う」というのでした。歎異抄二章の聖人のお言葉の中に  
各々十余ヶ国の境をこえて身命をかえりみずしてたずね来たらしめたまう御ころざし、ひとえに往生極楽の道  
を問い聞かんがためなり。

(一)然るに念仏より他に往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらんとおほく思召しておわしまして  
はんべらんは、おおきなるあやまりなり。

(二)もししからば、南都北嶺にもゆゆしき学生達多くおわ  
せられてせうろうなれば、かの人々にも会いたてまつり  
て往生の要よくよく聞かるべきなり。

## 石 田 十 九 三

(三)親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまい  
らすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに  
別の子細なきなり。

四念仏はまことに浄土に生るるたねにてはんべらん、  
また地獄におつべき業にてやはんべらん、総じてもて  
存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて  
念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからずそう  
ろう。その故は自余の行をばげみて仏になるべかりける  
身が、念仏を申して地獄にもおちて候わばこそすかされ  
たてまつりてという後悔も候わめ、いづれの行もおよび  
難き身なればとも地獄は一定すみかぞかし。

五弥陀の本願まことにおわしまさば、善導の説教虚言なる  
べからず、仏説まことにおわしまさば、善導の御釈虚言  
したまうべからず、善導の御釈まことなれば、法然の仰  
せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が  
まうす旨またもてむなしかるへからず候か。

（六）詮するところ愚身の信心におきてはかくのごとし。

（七）この上は念仏をとりて信じたてまつらんとも、またす  
てんとも面々のおんはからいなりと云々

以上、（一）から（七）まで、七回聖人の御様子が、あるいはやさしく、あるいはきびしく、（八）のところは、聖人はとっときの奥の手を申されたところだから、わがふところをのぞかれて、これならば私の云うことがわかってくれるだろうと云う思いをこめて申されたところである、と池山先生は仰言いました。

（八）は、私は念仏してどこへ行くのかすこしも知らないと言われたところ、

（九）は、本願の流れを師の法然上人からうけたまわられ、聖人としては、ただよき人の仰せをこうむって信ずる外に別の子細はない私ですから、私も申すこともむなしなことではなからうと云われ、

（一〇）は、私の信心はこのようなことです。

（一）は、ここまで申し上げたからには、念仏を信じようとも、またすてられようとも貴方がたお一人お一人のお考え次第です。

と申されるまでに、七度も、時にやさしく、時にきびしく、又はこのことを云っておけばとおもわれ、又は順々とお説きなされるところ、さらに突きはなされるところ、な

こうして同信会はそこで法話を聞くことになりました。

その頃松本解雄先生や大谷大学の信国淳先生も法話をよくして下さいました。下鴨に移ってからの同信会の活動は今まで以上に活発になり、地元の人達も参られ、遠く七条方面、東山松原通りや、東山三条からお参り下さいました。念仏の声は日々に高まり、講師も三人の先生の外に信国、松本の両先生をはじめ向島諦宣先生や学生親鸞会の先輩の方たちが法縁を結んで下さいました。同信会の皆様は有難いやら嬉しいやらでテンテコ舞をしたものです。

#### 京都一道会に参りて

昨年（昭和五十二年）秋、京都の浄住寺での一道会に参詣のために、下鴨説教所へと一日早く家を出ました。其時、東本願寺に参拝しましたら、めったに拝むことの出来ない御尊像を拝ませて頂けましたことは誠に有難い事でした。また大谷本願にも参拝し、宮地先生のお宅を訪問しました。先生は岡崎市に法縁がありましてお留守でしたが久方振りのお伺いしたので奥様と話はずみしました。先生には三人の御子さんがありますが、御長男は本願寺の開教使となられてカナダ、御次男はバンクーバーで教師、第三番目のお方はシカゴの本願寺別院に行つて居られるとのことでした。先生は一日もゆっくりと家に居ることがなく淋しいことと申され、また今年は御夫妻御一緒に、カナ

と、七度にわけて池山先生はお話し下さいました。私共は感激して帰りました。帰途学生達は、何の話かねと云う人、今一人はお念仏のお話ですよとか、今の話は歎異抄の話だよと云う者、色々聞き様で変わるものだと思ひました。

昭和十年は、同信会、京大友会館の集い、高倉会館の御法話をお聞きするのが私の一番のよろこびでした。

昭和十一年は私にとって不幸続きでした。春に馬が馬屋で倒れ、腰骨を痛め、廃馬になって家から担ぎ出され、自動車に乗せられたとき、あれだけなすいていた馬を見送るのですからたまりませんでした。馬には人間の云う言葉は判りませんが、私は馬に云いました。

今度生れて来る時には人間に生れてくるのだよ！と。そしてお念仏を聞ける人にと祈らずには居られませんでした。共に暮した年月が思い出され、私の衿上を喰えて吊り上げてざれた馬でした。私は仲好しを一つなくしてしまいました。私は馬頭観音菩薩にお参りいたしました。

また桜井広済会館が人手に渡ることになりましたので杉原果円師は下鴨松原町に手頃な家を見つけられ、其所を説教所にするために、松本解雄先生が東本願寺の許可を貰つて下さり、京都府庁へは京大学生監であられた河合悌介先生をわずらわせて許可になりました。

ダ、米国、を訪ずね、英国では御門主の大谷光照師に随行なされ、更にヨーロッパを廻られた由でありました。

午後五時頃、杉原先生宅（下鴨説教場）に着きました。種々ご馳走になりました。晩には同信会の同朋だった親友の西川たみ様がお出で下され、次に宮地先生の奥様もお出で下さいました。其夜十二時近くまで信仰の話、俗事の話、昔の思出など語り合つてお二人は帰られました。

翌朝、杉原先生御家族と御一緒に御なつかしい阿弥陀様の前で阿弥陀経を拝読いたし、朝食がすみました頃、高知県の杉村里馬さんが一道会に参りたいといつて来られました。杉村さんは杉原先生が田舎で学校の教師をしていられた時の教え子で、私も以前に二、三度お目にかかっていました。幸に宮地先生の御三男のお嫁様が自動車に乗せて下さつて、西山の浄住寺まで、連れて行って下さいました。

一道会は例年のとおりに榊原老師の歎異抄の拝読に始まり、花田先生の御法話、川畑愛義先生の一隅を照らすのお法話、長崎から団体で参詣なされた代表者の平岡坦様の御感話で会が終りました。いつまでもいつまでも池山先生の恩徳をしのぶ人達の続きますことを念じ、帰る時に池山先生書の一心正念直来オネガイダカラスダグキテオクレヨを拝読し、来年も参詣させて頂きたいと願ひながら帰途につきました。帰りに名古屋の一道会でも御挨拶を申す岐阜市の国広様に非常にお世話になりました。

あとがき

四月八日の釈尊の花祭りもすぎ、五月には親鸞聖人の降誕会を迎えますに付け、一般には故人を偲ぶには、その方の御命日でもありますのに、仏陀や聖人は、いつまでもいつまでも御誕生を祝うことに或時、フト不審を持ちました。それは、親が亡くなるように、子供の心の中にはいりこんで生き続けるように、世の親と仰がれる諸聖は、地上の姿を消されて、私共の心想の中に生き続けて下さるので、遠ざかれば遠ざかる程、離されれば離される程、いよいよその恩沢をこうむるのであります。そこにいつまでも降誕会を祝さずにはいられないのであります。

この時、近角先生の知恩報徳の一文をいただきました。又、福島先生が聖人の御晩年の信味を、正像末和讃とおして讃仰されました一文をいただきました。一道会の記は、池山友子夫人の手記と、昨秋亡くなられた向島諦宣師の池山先生追慕の文を「呼子鳥」から転載いたしました。当日榊原師が朗読下されたものであります。自照日誌抄に西元様が、榎木氏と三島翁の法味一端を御紹介下さいました。蓋戸不出に近い私にはいつも窓となって種々と教えて下さることを謝しております。法悦抄の清水凡秀さんは、盛岡の篤信の

人で、京都市左京区高野泉町四〇、文明堂で出版(定価八〇〇円送料一六〇円)されました。辞世の歌に「大願の船はあわてる要もなし、ゆられるままに風のまにまに」があります。

木村さんの詩は、視力の不自由さの中に、大きい字で原稿を整理して送って下さったものです。春すぎに退院出来ますように祈念しております。

ともしびの拙稿は、中日新聞に出して下さったもので、丁度百回になりました、ありがたいことです。

石田さんの信を行く旅姿、お読み下さる方々に、きびしく、またあたたくつたわっております。

庄松ありのままの記

勝光寺の坊守が、御法儀に心がけ、仏照寺と得雄寺とへ自誓を調べて貰うと、一人はよいとほめ、一人はわるいと叱られた。坊守はそれを心配していると、庄松云く「仏照寺様も得雄寺様もお浄土は持ってござらぬ。その人達の言うことに迷わずと、お浄土を持ってござる仏様の仰せにしたがうより外に、手はない手はない」と。

△御案内▽

- 毎月第一、第三日曜、午後一時半、一道会例会。一道会館の南隣り、南区駈上町二の八六、鬼頭康彦氏宅。市バス、新郊通り二丁目下車、東入ル三筋目、角。
- 地下鉄、新端橋終点下車。
- 教西寺、法話会。昭和区小椋町三丁目四毎月二十四日、午前・午後。市バス、御器所通り下車。又は北山下車。地下鉄、御器所通り下車。
- 蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。(但し日曜を除く)尾西市三条板倉名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価 半年 七〇〇円(送共)  
 一年 一四〇〇円(送共)

名古屋南区駈上町二ノ八八  
 編集・発行人 花田 正夫  
 電話八二一局七〇三七番  
 愛知県西加茂郡三好町大字福谷  
 印刷人 坂部 光雄  
 名古屋南区駈上町二ノ八八  
 発行所 慈光社  
 振替口座 名古屋 一〇四七〇番  
 郵便番号 四五七

慈光 第三十一卷 第四号 昭和五十四年四月十五日発行(毎月一回・十五日発行)  
 昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可